平城宮出土須恵器の産地調査 (1)

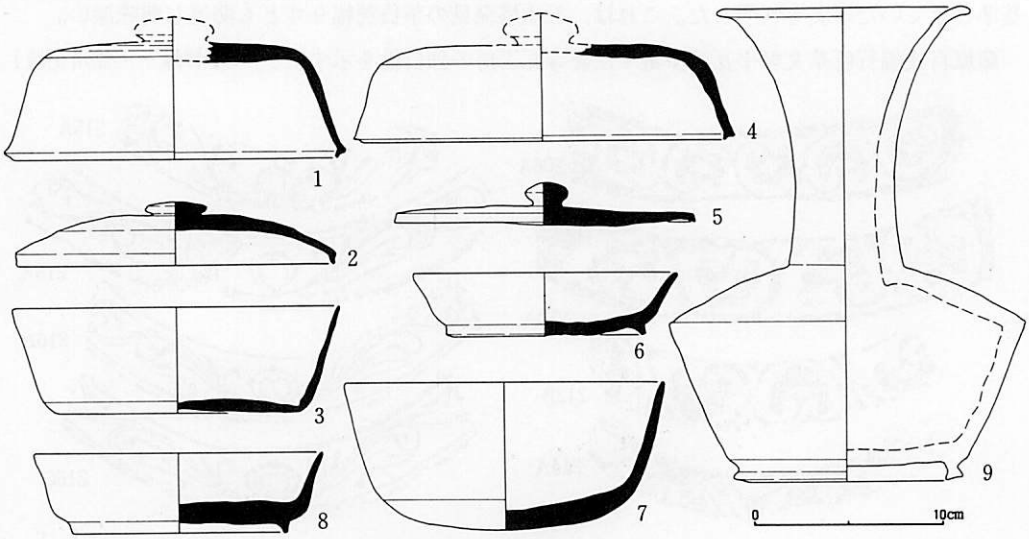
平城宮跡発掘調査部

近年の調査の進展により，平城宮・平城京出土の須恵器には多くの産地が認められることが判明しつつある。そのため，考古第二調査室は，各地の窯址出土の土器の調査を継続的に行うこととした。これは，古代における物資の貢納の問題の解明を，土器の面から迫ろうとするものである。今年度は，その第1年次として，岡山県寒風窯址群の調査を行った。

寒風窯址群は，岡山県邑久郡牛窓町に所在する。備前地方の古代窯業生産の中心をなす邑久古窯址群の中でも古くから著名なものであり，詳細な分布調査がなされている。また近年には周辺の整備に伴い，磁気探査と試掘調査が行われ，窯跡4基と古墳2基を確認している（岡山県教育委員会『寒風古窯址群』1978年）。今回は，寒風陶芸館と牛窓町民俗資料館に保管されている分布調査の採集遺物を調査した。杯A（3･7），杯B（6･8），杯B蓋（2･5），杯G，杯H，皿A，皿B，高杯，平瓶，長頸壺（9），壺蓋（1･4），甕などの器種があり，年代は7世紀から8世紀前半にわたる。図示したのは8世紀前半のもので，灰白色の精緻な胎土で固く焼き締まり，全面に濃緑色の自然釉が厚くかかるものと，赤褐色で焼成の悪いものとがある。なお，長頸壺は，完形品のため頸部の接合が2段構成か3段構成かは不明である。

平城宮大膳職地区出土の寒風窯の製品とされている土器（『平城宮発掘調査報告Ⅱ』p. 70）を現地の土器と実際に比較してみると，細部で多少異なる点があるものの，胎土や焼成は非常に似ている。また，今回の調査の結果をもとにして平城宮，平城京で出土した土器を再検討したところ，長屋王邸をはじめ，多くの遺跡から寒風窯産の土器と思われるものが出土していることも判明し，大きな成果をあげることができた。

（玉田　芳英）



寒風窯址群出土須恵器（1：4）